

## 最近 8 年半の第一口腔外科における エプーリス患者の臨床的 病理組織学的検討

寺澤久善・小松多賀子・亀井達哉  
篠木邦彦・佐藤隆吉・山田和祐  
田代直也・遠藤義隆・川村仁  
田中広一・丸茂一郎・藤田靖・林進武  
猪狩俊郎\*・山口泰\*・大久保勉\*\*

東北大学歯学部口腔外科学第一講座（主任：林進武教授）

\*東北大学歯学部口腔外科学第二講座（主任：手島貞一教授）

\*\*東北大学歯学部口腔病理学講座（主任：大家清教授）

（昭和 59 年 10 月 30 日受付）

### A Clinical and Histopathological Study of Epulis in the recent 8 and a half years

Hisayoshi Terasawa, Takako Komatsu, Tatsuya Kamei  
Kunihiko Shinoki, Ryukichi Sato, Kazumasa Yamada  
Naoya Tashiro, Yoshitaka Endo, Hiroshi Kawamura  
Koichi Tanaka, Ichiroh Marumo, Yasushi Fujita, Susumu Hayashi, Toshiro Igari\*,  
Tai Yamaguchi\* and Tsutomu Ohkubo\*\*

*First Department of Oral Surgery, Tohoku University  
School of Dentistry, Sendai (Chief: Prof. Susumu Hayashi)*

*\*Second Department of Oral Surgery, Tohoku University  
School of Dentistry, Sendai (Chief: Prof. Teiichi Teshima)*

*\*\*Department of Oral Pathology, Tohoku University  
School of Dentistry, Sendai (Chief: Prof. Kiyoshi Ohya)*

**内容要旨：**エプーリスは語源的には歯肉の上という意味で、歯肉、歯槽骨、歯槽骨膜、および歯根膜から発生した歯肉の限局性の良性の腫瘍に対する臨床的総称である。

今回私達は、過去 8 年半の間に当科を受診し、エプーリスと確定診断された 82 症例について臨床的、病理組織学的検討を加えた。

年度別症例数では、昭和 57 年が 16 例で最も多く、平均 9.6 例であった。主訴では、歯肉の腫瘍が大部分で 91.5% を占めた。男女比では、男性 30 例、女性 52 例で、1:1.7、年代別では、20 歳代に 18 例、40 歳代に 20 例とあわせて 46.4% を占めた。自覚してから来院までの期間は、3 カ月以上 6 カ月以内が 16 例と最も多かったが、30 数年というものもみられた。当科初診までの処置回数では、未処置のものが大部分で 91.5% であった。発生部位でみると、上顎 40 例、下顎 42 例でほとんど差はなく、上顎では前歯部が 19 例、下顎では小臼歯部が 18 例と多かった。誘因と思われるものは、半数以上が不明であった。臨床的所見としては、大きさは示指頭大から拇指頭大までのものが半数以上を占め、形態は有茎性、色調は赤色、表面は平滑、硬さは弾性硬のものが多かった。病理組織学的には、肉芽腫性 36 例、線維性 25 例、

血管腫性 3 例，骨形成性 15 例，巨細胞性 1 例で，肉芽腫性と線維性の移行型と思われるものが 2 例みられた。処置では，摘出が大部分で，他には凍結療法 2 例，レーザー照射 1 例があった。

## 緒 言

エプーリスは，歯肉に生じる良性の腫瘍で，炎症性の組織増殖および良性の腫瘍を含めたものの臨床的総称で，比較的しばしば認められる病変である。今回私達は，エプーリスと確定診断された 82 症例について，臨床的，病理組織学的検討を行なったので，その概要を報告する。

## 観 察 対 象

昭和 50 年 11 月より昭和 59 年 4 月までの 8 年半の間に当科を受診した患者のうち病理組織学的に，エプーリスと確定診断された 82 症例である。

## 結 果

### 1) 年度別症例数

昭和 51 年と昭和 57 年がそれぞれ 15 例，16 例と多く，平均すると，9.6 例であった（表 1）。

### 2) 受診した患者の主訴

歯肉の腫瘍が 75 例（91.5%）と大部分を占め，他は歯肉からの出血 4 例（4.9%），咀嚼障害 2 例（2.4%），歯肉の疼痛 1 例（1.2%）であった。

### 3) 頻度

① 性別：男性が 30 例（36.6%）女性が 52 例（63.4%）で，その比率は 1:1.73 であった（表 2）。

表 1 エプーリスの年度別症例数

昭和 50 年 11 月から	2
51 年	15
52 年	10
53 年	6
54 年	10
55 年	8
56 年	6
57 年	16
58 年	6
59 年 4 月まで	3
計	82 症例（平均 9.6 症例）

② 年齢別：男性については，偏りはあまり認められないが，女性については，20 歳代と 40 歳代が 15 例で多く，男女あわせると 20 歳代，40 歳代がそれぞれ 18 例（22.0%），20 例（24.4%）となり両者で 46.4% を占めていた。総括すると 20～40 歳代の青壮年に多い傾向を示していた（表 2）。

### 4) 自覚してから来院までの期間

3 カ月以上 6 カ月以内及び 6 カ月以上 12 カ月以内がそれぞれ 16 例（19.5%），15 例（18.3%）と多かったが，10 年以上というものが 2 例あり，その内の 1 例は，30 数年という長期間放置していたものであった（表 3）。

### 5) 当科初診までの処置回数

未処置のものが，75 例（91.5%）で大部分を占めたが，1 回摘出処置を受けたものが 3 例（3.7%），2 回摘

表 2 年 齢 と 性 別

	男 性	女 性	計
～ 9 歳	0	3	3 例（ 3.7%）
10～19 歳	4	3	7 例（ 8.5%）
20～29 歳	3	15	18 例（22.0%）
30～39 歳	5	5	10 例（12.2%）
40～49 歳	5	15	20 例（24.4%）
50～59 歳	4	7	11 例（13.4%）
60～69 歳	5	2	7 例（ 8.5%）
70～79 歳	4	2	6 例（ 7.3%）
80～ 歳	0	0	0 例（ 0 %）
	30 例 （36.6%）	52 例 （63.4%）	82 例

表 3 自覚してから来院までの期間

1 か月以内	8 例（ 9.8%）
1 か月以上 3 か月以内	13 例（15.9%）
3 か月以上 6 か月以内	16 例（19.5%）
6 か月以上 12 か月以内	15 例（18.3%）
1 年以上 2 年以内	10 例（12.2%）
2 年以上 5 年以内	12 例（14.6%）
5 年以上 10 年以内	6 例（ 7.3%）
10 年以上	2 例（ 2.4%）

表4 発生部位

	唇・頬側	舌・口蓋側	両側	歯槽頂	計
3 + 3	12例	8	4	0	24例 (28.6%)
5 4   4 5	4	2	1	0	7例 ( 8.3%)
8~6   6~8	3	5	2	1	11例 (13.1%)
3 + 3	8	1	2	0	11例 (13.1%)
5 4   4 5	9	7	1	0	17例 (20.2%)
8~6   6~8	7	4	0	3	14例 (16.7%)
	43例 (51.2%)	27例 (32.1%)	10例 (11.9%)	4例 ( 4.8%)	84例

注：1例は3部位に発生

表5 大きさ

米粒大	4例 ( 4.8%)
小豆大	10例 (11.9%)
大豆大	12例 (14.3%)
示指頭大	21例 (25.0%)
拇指頭大	28例 (33.3%)
鳩卵大	6例 ( 7.1%)
鶏卵大	3例 ( 3.6%)

注：1例は3部位に発生

表6 色調

正常歯肉色	25例 (30.5%)
赤色	50例 (61.0%)
帯紫色	6例 ( 7.3%)
貧血歯肉色	1例 ( 1.2%)

出処置を受けたものが2例(2.4%)、3回摘出処置を受け、その度に再発を繰り返し、当科を受診したものが2例(2.4%)認められた。

## 6) 発生部位

全症例では、上顎40例、下顎42例で、その比率は1:1.05であった。上下顎で分けると上顎では前歯部が24例(28.6%)、下顎では小臼歯部が17例(20.2%)と多かった。また唇・頬側が、舌・口蓋側の約1.5倍であった(表4)。

## 7) 誘因と思われるもの

57例(69.5%)は誘因と思われるものは不明であったが、妊娠10例(12.2%)、歯周疾患8例(9.8%)、歯列不正1例(1.2%)、外傷2例(2.4%)があった。

## 8) 臨床的所見

① 大きさ：拇指頭大、示指頭大がそれぞれ28例(33.3%)、21例(25.0%)であわせて半数以上を占めた。

表7 病理組織学的分類

肉芽腫性エプーリス	36例 (43.9%)
肉芽腫性と線維性の移行型	2例 ( 2.4%)
線維性エプーリス	25例 (30.5%)
血管腫性エプーリス	3例 ( 3.7%)
骨形成性エプーリス	15例 (18.3%)
巨細胞性エプーリス	1例 ( 1.2%)

以下大豆大、小豆大の順であった。ただし不定形で大きさが表現しにくいエプーリスの症例があったが、これは鶏卵大に含めてある(表5)。

② 基部の形態、色調、表面の性状、硬さ：有茎性のものが49例(59.8%)、広基性のものが23例(40.2%)であった。色調は赤色のものが約6割を占め(表6)、表面の性状では、平滑なものが66例(80.5%)、凹凸なものが12例(14.6%)、粗面が4例(4.9%)であった。硬さでは、弾性硬のものが46例(56.8%)、弾性軟のものが29例(35.8%)、骨様硬のものは6例(7.3%)で、記載不備が1例あった。

## 9) 病理組織学的分類

肉芽腫性エプーリスが36例(43.9%)、繊維性エプーリスが25例(30.5%)をあわせて7割以上を占めていた。また肉芽腫性と線維性の移行型と思われる症例が2例みられた。他には血管腫性エプーリス3例(3.7%)、骨形成性エプーリス15例(18.3%)、本邦では稀とされている巨細胞性エプーリスが1例みられた(表7)。

## 10) 処置

外来での摘出の場合が最も多く、75例(91.5%)を占め、再発例としては、3]の歯根膜由来と思われる症例が1例だけあったが、再摘出を行ない、その後再発

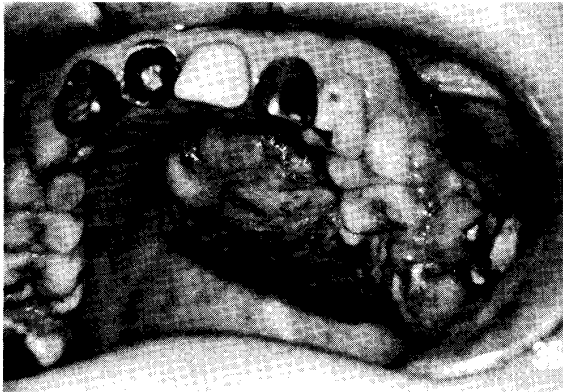


写真1 巨大なエプーリスのため入院して摘出処置を行なった1症例(54歳, 女性)。5の頬側から発生し口蓋側まで増大した骨線維性エプーリス。

はみられていない。他には、エプーリスの大きさが巨大であったり(写真1)、全身状態等の問題から、入院して摘出したものが4例(4.9%)、凍結療法が2例(2.4%)、レーザー照射が1例(1.2%)あったが、いずれも再発はみられていない。

## 考 察

エプーリス患者の主訴について、歯肉の腫瘍が75例(91.5%)であった。これについては岩崎ら<sup>1)</sup>の報告では90.5%が歯肉の腫瘍を主訴としており、これと類似していた。

性別の頻度では、男性が30例、女性が52例で、その比率は1:1.73であり、好士<sup>2)</sup>の報告では1:1.98、石川ら<sup>3)</sup>では1:1.8、張<sup>4)</sup>では1:2.2、Grüner<sup>5)</sup>では1:2.2、Brown<sup>6)</sup>では1:1.7で傾向としては同様であった。

年代別の頻度では、男女あわせて20歳代、40歳代が

それぞれ18例(22.0%)、20例(24.4%)と両方あわせると46.4%を占めていた。好士<sup>2)</sup>は20歳代、石川ら<sup>3)</sup>、Grüner<sup>5)</sup>は20~30歳代、Brown<sup>6)</sup>は20~40歳に多く発生したという報告と比較して、総括的には20~40歳代の青壮年に多い傾向は同様であった。このように20~40歳代の青壮年にエプーリスが多く発生するのは、この時期に内分泌系の変化があり、また特に女性では妊娠による影響が考えられ、齶蝕あるいは補綴物が口腔内に増加し、歯周疾患の頻度も増加することも何らかの関連があるものと思われた。

放置期間については、3カ月以上6カ月以内、及び6カ月以上12カ月以内がそれぞれ16例(19.5%)、15例(18.3%)と多かったが、Cooke<sup>7)</sup>は1年以内に来院するものが多いと述べており、ほぼ同様の傾向であった。このように放置期間が長いのは、エプーリスの増大が比較的ゆるやかで、無痛性であり、機能的に障害を感じるまで放置するためと思われ、また気付いても癌恐怖症等から受診を遅らせる場合もあるように思われた。

発生部位でみると、上顎40例、下顎42例で上下差はなく、好士<sup>2)</sup>は1.25:1、石川ら<sup>3)</sup>では1.32:1、張<sup>4)</sup>では1.60:1の報告とは異なり、Brown<sup>6)</sup>の1:1.02とほぼ同率であった。石川ら<sup>3)</sup>は、上顎前歯部が最も多く、ついで下顎大臼歯部、上顎大臼歯部の順であるとしているが、私達の結果では、上顎では前歯部24例(28.6%)と同傾向であったが、下顎では小臼歯部が17例(20.2%)で大臼歯部よりも高頻度であった。また頬舌側別では、唇・頬側が舌・口蓋側の約1.5倍と多く、諸家の報告と同傾向を示していた。

誘因と思われるものでは、不明のものが大部分であったが、明らかに妊娠が関与していると思われる症例が10例あり、20歳代女性の15例の内3分の2を示

表8 放置期間と病理組織学的分類

	肉芽腫性	移行型	線維性	血管腫性	骨形成性	巨細胞性
1ヵ月以内	6例	1				1
1ヵ月以上3ヵ月以内	10		3		1	
3ヵ月以上6ヵ月以内	8		4	3		
6ヵ月以上12ヵ月以内	5		5		5	
1年以上2年以内	3		6		1	
2年以上5年以内	2		4		6	
5年以上10年以内	1		3		2	
10年以上	1	1				

表9 エプーリスの大きさと病理組織学的分類

	肉芽腫性	移行型	線維性	血管腫性	骨形成性	巨細胞性
米粒大	4例					
小豆大	7		1		2	
大豆大	7	1	2	2		
示指頭大	7		9	1	4	
拇指頭大	7		13		6	1
鳩卵大	3		1		3	
鶏卵大	1	1	1			

注：1例は3部位に発生

表10 色調と病理組織学的分類

	肉芽腫性	移行型	線維性	血管腫性	骨形成性	巨細胞性
正常歯肉色	3例	1	13		8	
赤色	29	1	10	3	7	
帯紫色	4		1			1
貧血歯肉色			1			

表11 硬さと病理組織学的分類（記載不備の1例を除く）

	肉芽腫性	移行型	線維性	血管腫性	骨形成性	巨細胞性
弾性軟	22例		3	1	2	1
弾性硬	14	2	20	1	9	
骨様硬			2		4	

す高率であった。

エプーリスの臨床的所見をみると、大きさは拇指頭大から示指頭大、茎部の形態では有茎性、色調は赤色、表面の性状は平滑で、硬さは弾性硬のものが最も多かった。

エプーリスの病理組織学的分類では、肉芽腫性エプーリスが36例(43.9%)、線維性エプーリスが25例(30.5%)をあわせて74.4%を占めた。好士<sup>2)</sup>では、肉芽腫性29.9%、線維性33.1%、石川ら<sup>3)</sup>では肉芽腫性32.3%、線維性40.5%という報告とは割合が異なり、岩崎ら<sup>1)</sup>の肉芽腫性39.7%、線維性28.6%の報告に近く、肉芽腫性のものの方が多かった。しかし両型の占める割合は総じてみると類似していた。また巨細胞性エプーリスが1例みられた。欧米では、エプーリスの約半数を占めると言われているが、本邦では稀で、Cooke<sup>8)</sup>によると好発部位は、犬歯および小白歯で、下顎に多いというが、今回私達の症例では、43]の頰側であった。なお、線維腫性エプーリスと先天性エプー

リスは、今回の検索ではみられなかった。ただ線維腫性エプーリスの場合は、線維腫という診断のもとに処置されたものもあったのではないと思われる。

放置期間と病理組織学的分類の関係をみると、肉芽腫性のものより線維性、骨形成性のものが比較的放置期間が長く、放置期間中に肉芽組織の線維化、石灰化が進んだものと思われた(表8)。

エプーリスの大きさと病理組織学的分類の関係をみると、肉芽腫性のものでは、拇指頭大までは比較的均等にみられるのに対して、線維性、骨形成性では、拇指頭大のものが最も多く、示指頭大のものがこれに次いでいた。これは前述の放置期間と関連するが、エプーリスの長期間にわたる増殖中に線維化、石灰化が進み、比較的大きなものとなったと思われた(表9)。

色調及び硬さと病理組織学的分類をみると、肉芽腫性のものが、赤色で弾性軟のものが多く、線維性のものが正常歯肉色で弾性硬のものが多かった。これは肉芽腫性エプーリスが炎症性肉芽組織の増殖から成るも

のであり、線維性エプーリスが増殖した肉芽組織の線維化したものであることから説明できると思われる(表 10, 11)。

## 結 語

最近 8 年半の間に当科を受診したエプーリス患者 82 例について臨床的、病理組織学的検討を加え、報告した。

本論文の要旨は、第 5 回東北大学歯学会(昭和 59 年 6 月 23 日、仙台市)において発表した。なお、第二口腔外科所属の 2 名が、第一口腔外科在籍中に診療した症例も含まれていることを附記する。

## 文 献

- 1) 岩崎弘治, 梶川幸良, 大西 真: エプーリス 63 症例の臨床的観察. 日口外誌 **22**: 332-337, 1976.
- 2) 好士和夫: エプーリス(歯肉腫)の臨床的並びに組織学的研究. 口病誌 **26**: 1666-1681, 1959.
- 3) 石川梧郎, 秋吉正男: 口腔病理学 II. 永末書店, 京都, 1969, pp. 740-751.
- 4) 張 丕明: 本学における最近 6 年間のエプーリス患者の臨床統計的観察. 歯学 **58**: 212-221, 1970.
- 5) Grüner, E.: Die Epulis und ihre Therapie. Dtsch. Msch. Zahnhk. **33**: 63-87, 1915.
- 6) Brown, G.N., Darlington, C.G., and Kupfer, S. R.: A Clinicopathologic Study of alveolar border epulis with special emphasis on benign giant cell tumor. Oral Surg. **9**: 765-775, 888-901, 1956.
- 7) Cooke, B.E.D.: The fibrous epulis and the fibro-epithelial polyp: Their histogenesis and natural history. Brt. Dent. **93**: 305-309, 1952.
- 8) Cooke, B.E.D.: The giant-cell epulis: Histogenesis and Natural history. Brit. Dent. J. **93**: 13-16, 1952.